

Title	印度支那の古代文字様彫刻
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.138- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

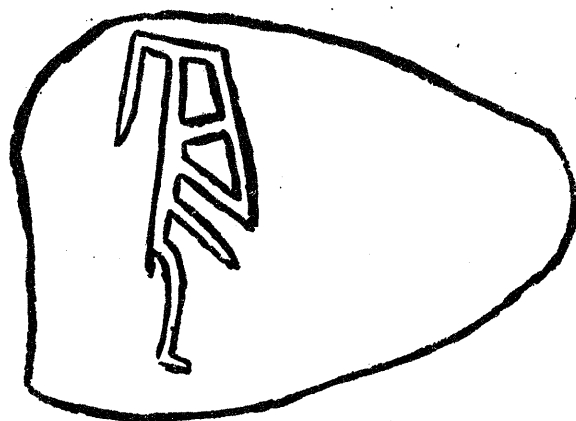
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

印度支那の古代文字彫刻



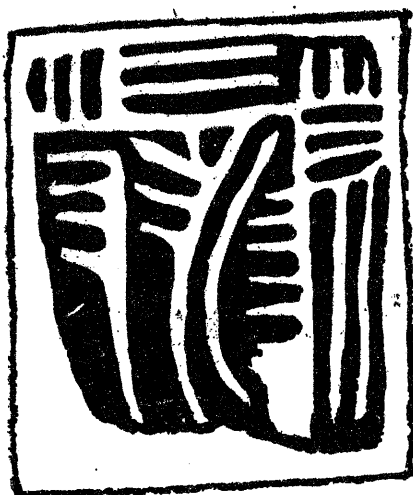
(一)

河内フィノール博物館に陳列されてある石器時代遺物の中由緒不明な文字様の彫刻が若干存する。その一つは既にコラニ女史が、一九二九年の *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, P. 278 に報告してある一小石斧又はグラトア風の石器上に刻された横向き人體様の模様で古代漢字らしくもあるが、はつきり斷言は出来ぬ(挿繪一)。



(二)

これは諒山州の *Lea-dat* 洞窟で同女史の一九二五年一米の深さから發掘されたものである。第二は次の第三と同様まだ未發表のもので印章の上に刻され、矢張り古代漢字との類似を思はしめるもの(挿繪二)。これもコラニ女史が諒山州の西南 *Tat sen* 洞で發見されてをる。第三は全く系統を異にする文字を刻した印章で同女史がラオスの *Cannon* 地方



(三)

The Khek の東安南に至る道路の途上で發見したもので殆ど路上に迫る岩窟の下二五ミリメートルの深度で有肩石斧、土器、貝環などと共に發見されたと云ふ(挿繪三)。一體カンモン地方には巨石遺物もあり、古代文化の導向を知る上に重要な地方である。彫刻された模様果して文字であるか、もしさうとすれば何處の文字と關係つくか吾人には今の處全く想像がつかぬ。たゞエウジイ氏が印度支那に新石器時代文字の始原を求めようと企圖されてをる今日此印章は相當に注目を惹かるべき價值を有してをる。なほハノイの極東學院で蠻の文獻を檢索してゐた際その A 二七一の一の中に線狀印章を一個發見したが勿論タケクのそれとは遙かに遠いものである(松本信廣)。